

編集者「つなぐ」雑記

伊集院郁夫

♪きょうも たのしく すみました
なかよしこよしで かえりましょう
せんせい さよなら またまたあした
せんせい さようなら
みなさん さようなら♪

通っていた保育園でうたった「帰りの会」の歌

で、ずっとずっとこの歌詞のとおりに歌っていた。ある時、おやつ？と思う箇所につかつた。それを確認しようと娘に聞いてみたが、そんな歌は「しらなーい」と言う。それも素っ気なく。息子にも聞いてみた。すると今度は「へんなうたー」ときた。「しらなーい」に「へんなうたー」、こうなると、妻に聞けば「……」となり

そんな気になったので、聞くのをやめることにしました。

さてその箇所だが、出だしの「きょうも たのしく すみました」の部分である。「きょうもたのしく」まではいい、その次の「すみました」のところでおやつとなったのである。

これは帰りの会で歌う歌だ。「すみました」のところが抑揚をつけ力強く歌われたとしたら「ああ、今日もおわった、おわった、ヤレヤレ」という感情がこもっている？と思えても不思議ではないかなと感じたのである。歌は担任と園児が向かい合って歌っていたが、互いにヤレヤレと思っていた、そう思うと、複雑な気分になる。もしかすると、その日疲れていた担任が「本音」で歌いそのまま、ということはないと思うが……。

そこでその部分は「すきました」と時間の経過を表す歌詞ではなかったと思ひ、確かめたかった

のだが、わかったのは「しらなーい」「へんなたー」だけだったわけである。今でも正確なところはわからない。機会があれば確かめたいと思っているが、家族以外に真顔でこの歌を歌い質問する勇氣はこの歳になってはない。聞かされるほうもつらいのではないか。

今回、「編集に携わる者」の立場から「つなぐ」をテーマに何を書いてもいいという機会をいただいた。「編集者は語らず、ただ書かせるのみ」と思ってきた者がテーマにそって書くというのはテレくさい。まして「編集者」を名乗るにまだ役不足と感じるのでなおさらである。ただ、あらためて「つなぐ」と考えた時、何をどうつなぐのか考えてみる良いきっかけになった。「み」「ぎ」のたった一字へのこだわりも、もしかすると編集という仕事の影響しているのかもしれない。

*

さて、出版物が世に出るには、まず書き手がいて、出版社（企業家）がそれらの労作を出版することを決意し、契約し、制作することによってできるしくみが一般的となっている。その両者の関係をスムーズに進行するよう潤滑剤の役目をするのが「編集者」と考えられていて、書き手を追いつ、原稿を集め、割り付け、校正に没頭するといふきわめて忙しい働きとなる。

「編集」の仕事に、あこがれる方も多いようだが、幼稚園の先生の仕事や「今日は、雑草とり」に、どぶのお掃除」だったりすることも案外多いと聞くと「へえー」と驚かれるのと同じで、随分と地道なものである。

例えば校正。ところによっては「校正者」と「編集者」をわけるくらいの位置をしめる仕事で、一語一語、原稿と付合わせ、原稿どおり間違はなくゲラ刷り上の文章の再現を果す技である。

初校の赤字入れ、著者校引き合わせ、再校、三校、素読みの文脈内容にわたる検

討を経て、文章に誤りのない、誤字誤植のない責了ゲラを印刷所に渡して作業を終えるという地道な作業である。しかも完全な校正はないと言われ、るほどにやってもやっても気になる果てしない作業でもある。

編集に携わりははじめのころ、「校正は書き手と読者をつなぐひとつのカギ」と、その重さを折りにふれ先輩から説かれたが、それは皆苦い経験からきた訓えでもあった。

電算写植を紹介する冊子の中の随筆で「校正の神様」という題の書き手の書きぐせを熟知した練



達の校正者の話を讀んだことがあったが、「文章の生命は、漢字・かなの使い方ひとつにかかっている。それを校正者がさかしらに直してはいけない」という戒めの内容であった。自分も「校正とは字と字を引き合わせるもの讀んではだめだ」と教えられ、原稿とゲラ刷りを何度も見比べているが、安心したことは一度もない。

確かに、一字の脱落、誤植が文意をそこない、書き手の意図を讀者にあやまりつたえてしまうこととがあり、とても「赤鉛筆一本で優雅な内職」とはいかないのである。

初めのころの体験だが、担当の保育雑誌で実践報告を扱った記事があり、その中のある物語を引用した箇所です、

「……ジャックは木の根元にすわって、足を投げ出し、帽子を腹までかぶり……」

と、やってしまったことを思い出す。腹は眼の

誤植だったのである。この時はガックリ、ただただ、ガックリし、「書き手と讀者をつなぐ」難しさと誤りの恐ろしさを知らされた。まさに「コウセイ オソルベシ」である。

ところが、昨今の「ワープロ」の普及はすごいもので、送られてくるほとんどがそうした形式の原稿となった。中にはなかなか使いこなせず苦労の跡がわかるものもある。そのせいも、書き手もそれを使いこなすことが第一で、神経が表記の細部までいきわたらなくなったのかもしれない。

一例だが「……授業の過程を……」を声をだした讀んでいただきたい。「……ジュギョウノカテイヲ……」。そのままとおつてしまふ。「虚心坦懐」「キョシンタンカイ」。「虚心（わだかまりのない心）をふところにおいだく」とことと、通じるような気もするが、国語辞典では「虚心坦懐——先入観をもたず、ひろく平らかな心。また、そうし

た心で物事に臨む態度」となっている。以前なら「文選」（文字をひろう）「植字」（組版をつくる）といった熟練工が気付き直すこともあった。しかしその印刷過程がなくなり、オペレーターによるコンピュータ化がすすむようになった今日では、前述したように、原稿に忠実な校正の原則にもいくぶん裁量の余地がうまれることになったようだ。

ともあれ、他にもそういう地道な編集実務をとおし「書き手と読者をつなぐ」出版という仕事が続けられているわけである。逆にそういう働きがなければ出版物はできないのである。ただ、編集実務の技だけで書き手と読者をつなぐのかといえはそうではない。

たとえば適切かどうかは分からないが、画学生が、今は画学生としての自分を自覚することで、ひとかどの画家になるべく自分を認識するよう

に、編集者も編集実務家としての自分を自覚することで、やがて「編集者」となりうる自分を設定できるのではないかと思うのである。つまり「編集者とは」という構えが必要になってくるのである。『暮らしの手帳』の花森安治、『世界』の吉野源三郎、『思想の科学』の鶴見俊輔など、それだけあげてもきりがないほど、強い信念をもち主張し続けてきた「編集者」の先達がいた。冒頭「編集者」として名乗るには不足と書いたのも、それほどに仕事をしているのかという自分自身への問いでもあった。ずいぶんと大げさで生意気な言い方にはなるが、あえていいたい「千万人といえども吾往かん」。まずそう主張することが編集者として「つなぐ」はじめの一步になるのである。街の書店に学術専門書がほとんど並べられることのない今、なおさらにそう感じている。

（新読書社）